

朝鮮丁卯胡乱考

——朝鮮・後金関係の成立をめぐる——

鈴木 開

十七世紀前半における朝清関係の成立は、朝鮮王朝の対外関係史上、非常に重要な事件であるが、そこに至るまでの事情は十分に考究されておらず、朝明・朝清関係に対する実態解明が進展しない原因となっている。本稿では、朝清関係の成立過程を解明する端緒として、仁祖五年（1627）の後金による朝鮮侵略事件である丁卯胡乱について検証し、後の朝清関係の歴史的な前提となる朝鮮・後金関係の基本的性格を明らかにした。

まず丁卯胡乱に至るまでの朝鮮・後金関係について考察し、親明的といわれる当時の朝鮮朝廷においても、後金への使者派遣が計画されるなど、交渉再開にむけた努力がなされていたこと、一方の後金は、明の毛文龍勢力への警戒と、深刻な飢饉によって朝鮮侵略に踏み切ったのであり、準備不足の軍事行動であったために後金軍内では意見対立が生じ、講和交渉にも支障をきたしていたことを指摘した。

次に丁卯胡乱時の外交交渉について考察し、後金では瀋陽に残ったホンタイジと、前線司令官のアミンとの間に認識の隔たりがあり、そのために江華盟約と平壤盟約という内容の異なる二つの盟約が結ばれたが、朝鮮朝廷とホンタイジはともに、両国の政治的優劣を規定しない江華盟約を同盟の根拠と認識していたことを明らかにした。

最後に江華盟約に基づいて開始された両国間の使者往来と、それにもなっとなって行われた外交交渉について考察した。その結果、朝鮮側の熱心な働きかけが、義州に駐留していた後金軍の撤退へとつながったことが明らかになった。また交渉の過程で、定期的な礼物や国境での開市の実施について議論されることはなく、仁祖五年における朝鮮・後金間の兄弟関係に明確な実態があったわけではなかったことを指摘した。以後の両国関係には流動的な部分が相当程度残ることになるが、それは丁卯胡乱における盟約の曖昧さに起因するものであったといえる。